山紀談

一

函番號	41 號
種別	國
購入番號	32154 號
月日	月 日

919.5
338
Vol-1

備前藩 湯浅先生編輯

常山紀談

千鍾房
宋榮堂 製本

書肆

滋賀県立図書館
學海叢書印

常山紀談序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士武功也。權謀形勢備矣。於馳驅周旋。蓋獨詳焉。世之君子。動謂兵顧將畧何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此不誓古者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出為將。善射御。先士卒。勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。士卒亦以武自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。至泯社稷。而死者不過千百。則先王之遺也。秦漢以來。文武異官。大將不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。擢至將萬人。而黥面刺臂。目不識字。士大夫視以為

奴隷人人不自重惟以賞罰威之耳時將亦制陳法明懸令以一切立功終不能使士卒自喜焉後世之戰僵尸百萬功唯數大將而裨將以下無一傳名者兵制異也故謂先王之世不尚馳驅周旋者不誓古也昔者皇朝軍團取法隋唐第異邦俊民皆從事科舉椎魯亡識者乃為兵我邦則公卿世官州郡之民不舉朝廷豪傑之士不在南畝則為兵東夷數叛源氏世將恩義下結武人漸貴保平之後皇綱解紐自鎌倉至室町氏日尋干戈時將皆賴士卒之勇以決勝人自為戰未暇遑講兵法也至甲越二公稍有節制而士愈益自喜以接勝國名垂竹帛者數百人神祖初起尤名得士一統宇內封建諸侯諸侯亦各建將帥為卿大夫世其祿位寛永以後有兵家者流潤色甲越遺言以教人舉世宗之其人守一家所傳不用心於將士之談話戰國之事往往失實或又謂戰國時多屢軍立功者故諸將不吝爵祿以畜士太平已久世無喋血有如萬一邊圉有警則莫如遵異邦之法明法令嚴賞罰以率之近世將士之談無所用也殊不知異邦之兵皆卒徒故唯可以法使也我邦士大夫皆出自武騎國家待士養其廉

恥。使人人自喜。平生待以君子。則臨事不可徒以法令約束之也。故謂馳驅周旋。非當世所尚者。不通今也。士大夫不聞將士之談。則無以自勵。人君不聞將士之談。則無以作士氣。在今兵法之要。莫先於近古將士之談。今列國士大夫莫不學兵法習武藝。而不用心於將士之談教者。之過也。世多野史志戰國之事。真偽雜糅。言無統紀。獨湯君。折衷百家。撮其雋永。以垂不朽。國初以來。未之有也。其書務崇節義。雖必録。未又概載國朝太平君臣言行之美。以翼名教。蓋其善志也。君世仕西藩。落落寡合。弗為名計。世。尠知君者。為人博學篤行。器識高邁。當世未見其倫。此書也。行人其庶幾窺豹之一斑矣乎。常山備之望也。君居有常山樓。

明和丁亥九月甲子

龜山松崎惟時撰

予嘗慨往事之棼々若滅若亡傳於今者何寥々哉
蓋載籍未備世遠磨滅也夫前言往行者得失之林
君子可以觀世矣載籍散泆不獨吾邦為然而已
也倚相之丘索惠子之五車向歆孟堅之所録逞々
乎雯墜而況吾邦乎於乎室町氏以前亡論已及
群雄虓闞並為戰國網漏吞舟之魚疆埸多壘采山
煑海塞井夷竈狺々乎沐猴哉豐王以竊金黔首攘
臂乎草野奮其威詐雷震霆擊鞭笞海内三韓草靡
安知非炕龍絶氣紫色翹聲聖王之驅除乎宜哉不
祀忽緒其間仁人義士齎志呑憤以没世者卓行懿
範湮盡罔聞豈不悲邪迨吾
神祖聰明神武革命創制解民倒懸列朝重熈百年
謐如或遇大史氏采簡録謀臣經國之略武夫野戰
之功則何以哉湮盡罔聞豈不惜乎予適每有勝國
以来遺逸事得諸敝篋斷簡聞長老黄髮所謂記廼
削牘識之往事之焚々庶幾存十一於千百匪有意
於備不朽矣大史氏之所索也近者取而閲之其所
識多國俗捍擴所憙技擊相高賈勇搏人之談犬鷹
之事哉其人骨已朽矣庸何足傳乎後世予於是乎
重慨之烏乎保平之間源平迭興上義媮死尚信伏

節習以成性孰與元天之際士無常君國亡定臣朝
委質而夕倒戈戎首者乎哉風俗之道士為政前言
往行得失之林君子可以觀世矣是為序

元文四年巳未五月九日　湯元禎

常山紀談巻之一目次

一　長尾輝虎越後を治められし事
一　輝虎平家を称らせて関まつ事　附佐野天徳寺の事
一　参河國伊田合戦の事
一　近江國音羽城軍ゝ事
一　荒木安藝守討死の事
一　甲斐國韮崎合戦乃事
一　賀平二郎功名の事
一　佐伯惟常高崎城を乗取事
一　北條氏康智計の事
一　毛利元就嚴嶋合戦　附盲人間者の事

一 元就伊豫の河野より船を借りる事
一 那須の与一宗隆安深慮の事
一 太田持資奇道を志す事
一 持資京より上り詩の事 附かゝる死の歌の事 沙汰
一 木全知矩連歌の事
一 輝虎私市城を攻らる事
一 輝虎太田三楽が子を質に取る事

常山紀談凡例

一 凡此書天文永禄の比より慶長に及ぶまでの事実をあつめ記せり戦國の時勢國初の風俗武人の気象皆世を動る人の尤徴るべき不しては輯録の本意なり明君賢佐乱臣奸賊の勧懲ふ具ふ所紀自ら其中ふ見あれば必しも評論をもちさば

一 吾國の士風源平の世と戦國の世と実同ちがふ非ず元古の人言ひ出る義を尊び節操を重んじける事ども古き物語よりえらび載せの士多くは利名を貪ふあり今川氏の没落北條氏改滅亡の時死ふ殉ずる人詳しきれば節義の士の姓名を逸せん事ちゝかしく侍るあて

殉難忠臣は姓名をもるるも又此書の本意なり

一

戦國の詞は茫洋なるゆゑ相伝て誤まるもの少からず一事にて異説多きあり因矣熟々是を考へるに其説々を悉さるせり人は姓名及年月の審なるもの只記傳へから伝ふるもふもせるハ比校さてゞ典籍のなる事ハなり

一

戦國の武者詞一種あり拙られてひとめられるとふがめさらぬもの皆其伝へ来るまゝにもるせり又いひ伝ふる世の詞も生伝ふるやうもるを文字を脩飾せざる事は其世代ふるく記録乃実不実分明なるゆゑ故なり左傳ハ其世の実録にて公穀乃二書ハ拙れ世もるせ其とりゆゑ其

詞ふるめて分るゆゑ文もられバなり然もてゞ大ふ謬まるゆゑ

もハ改もるせるもあり世人甲をかぶと曹をよろひもるゆゑ

めさハ皆改もるせり

一

賞誉すべき事ふも非ずもるせるあり是ハ唯其世のみ

さはと想ひ見べきさゞ為なり昔賞誉もるりと是ゝ

事ゝもん得ざるもあり天正年中肥後の有動を秀吉

柳川にて殺されし時立花宗茂有動が代の供して来まる

新田岩良ハ剛七者なりとく惜て告もるせられ善

良其を有動よりかくして告もるべ運をひくべ是

なる者ハ生れバとて主君の明日禍かゝるべき事ハ

告ざるをいうて其時もるを褒ゝるゝ此ハ非義の義なる

[illegible]

常山紀談卷之一

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○長尾輝虎のもとの名を猪松といひて輝虎始は景虎と云ふ後京へ上られし時公方より輝の字を賜て輝虎と称せ鎮守府將軍良兼四代の孫左衛門尉致經二男村岡五郎忠通が末にて世に長尾と称せ後管領上杉の養を受て上杉と称せ甲陽軍鑑に梶原景時が末孫といへり信濃に居住す父為景の心ざしにて先母兄を三郎といふ猪松あり若少く出家せしめて下越後の極楽寺の僧言なりしを家へ呼て浄安寺小姓やられけるを金津彩兵衛供して米山越しにて

る時猿松八幡宮うまとばかちの士背ふかれ負て山を登り巖の
坐ふ所ふ所く波竜やられものとう出しうゆくせり猿松
遠く頭城府内を眺やりやうち涙ぐみく我かく打ちぶく
いとそくそくしられやぐて軍をおこして志をとぐなくば此
山ふよぐ登り府内を目の下に見おろしべしちくべき宮の地
ありといくれしば乳母子ふる本条美作守も舌をふくひ其
翌なるすれくひてと悦ふり
一説ふ為景猿松を憎くて甘傳城就京ふあづけらる此
時十二歳ときとすり諸国をめぐりて風俗人情を窺
地の利を窺ふといふ
かくて猿松九年の間寺ふ入れどん僧ふるべき志ふ天文

十四年為京越中ふく討死あり嫡子三郎暗弱ふく越後乱
き不くを歎ふ掠奪まと者ふしば父の吊軍せんと思ひ立宇
佐美駿河ち定行をかくひ天文十六年正月十八歳ふて元
服ー平三景虎と名のり椽尾の城ふ旗をあげられ三郎
ふをふ長尾越ち政景ふ七千ふ兵をそくく攻ふ
景虎矢倉ふおりて敵ハ今夜引ふとぎき物ふ
ふくを定行ふてくと攻まり空ーく退くぎきやとふ
景虎敢ふ追ふ緊なー久しく囲むべき計ふおくとひき退ん
處を敵ハ後ふと疑なーとくれるまば定行も拉ふべとそ
夜ふ入りて出ふ宗ーて政景の軍みぐれきちく敗北しけり
三郎又打向ふ京虎柿崎の下濱ふ陣をゆうやぐて三郎と打

やがて三郎疾内を出でくし退く時景虎采山の東坂本ふく
我が方にまぎれ休て後追うていざやとて小家に入る定
行あるべくもたゝとく追討ちぬべ破竹の勢とハ是なるべし
とゝ人ども方いびきかさて眠らまてらば苦かる時を失ふ事
よとなりきあくりやゝみて京虎つと起あがり三郎の軍兵山
を三分の一ばかりに越さりとそゆいざ追討やとて馬ふのを
螺の貝吹きてはせ亀破坂よりおゝけ大ふ井徒れり
定行ゝ北ゝと撃べきはかるゝ眠せれゝハ山を追上らんと
敵をかさようけおバ利有べゝ敵下り坂ふなりて引立るを
うゝとの事あの老臣等ぶ及ぶきふのゝ所こゝゝハわづか
十八歳弓矢をとゝる事誰やの人ら宿をるべなんとそかゝるる

景虎越後を治め得ゝ高野山に出奔せんとて長尾家の長
老おあり京虎かくバ國を敵ふ奪ゝるゝいざとゝく関の山と
おひ行てさはゝとそゝめられバ京虎のいそく我年とゝく威重
うゝび老臣等我を狂せゝ國の根本立て此國人の為ふ利を
求るハ我身ふ害をやゝなり之より後吾命を背くまゝ
ゝなゝバ祇文をまて得させよさゝバとゝぶまゝといれ
ぶゝふもふゝよる君と仰ぎなぎたなりいて命を叛き
ゝるきとやゝるゝバ市ゝバとて立ゆり三郎を隠居さ奉之よ
威をふゝひ越中ふ攻入て父ふ帰宅まらげられゝり長臣の中と
二心ある者を林泉寺といふ処ゝく腹切せて國を治めれ
少ゝ晩年謙信と称しぬ

○鞆虎あゝ夜石坂検校ゝ平家をかゝゝをゝ宮ゝ方ゝ鶴ゝ
段をゆゝて去さりに義経せゝれりかゝゝの者どもあゆゝゝ思
ひゝゝゝバ鞆虎のいくゝく吾國の武徳も衰へゝゝゝゝ
昔鳥羽院ゝ仏所禁中ゝ妖怪ゝゝゝゝゝゝ八幡太郎ゝ呪法ゝ
て鎮ゝ府将軍源義家と名のりゝれバ妖怪消ぬゆゝゝゝ
丈ゝ頼政鵺を射ゝれども枝死ゝて井野隼人ゝ殺ゝ
てゝゝゝゝゆゝ義家呪法ゝゝゝゝゝ天仁元年ゝまれ
鵺乃出ゝゝ近衛院仁平三年ゝまバ僅ゝ四十六年ゝゝゝ武
徳既ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ十年ゝゝゝ又頼政ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

州北條の幕下佐野城ゝ天徳寺勇将ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
邑法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とかたりけるといへバ天徳寺驚きて只今の言ハ各を頼母しく
思ひしが今此一言にて力を落しぬるぞとよ先佐々木が
事をよく心にうかべて見られ候へ右大将舎弟の蒲冠者にも賜ハ
らざる竉愛の梶原にも賜らぬ生唼を高綱に給ハりしかバこそや
がて甲斐もなく此馬にて宇治川の先陣せざらんにハ人に先をこ
されなバ必討死して再び帰るまじき暇乞して出ける其志
おもひやるべきなりとて涙をのごひけるがしばしありて
いひけるハ又那須與一も人多き中より撰ばれて只一騎陣
頭に出しより馬を海中に乗入て的にむかふに至るまで源
平両家の咡をとゞめて見物せり射損しなバ味
方の名折なるべし馬上にて腹かき切て海に入んと思ひ定め
ける志を察して見れバ弓箭とる身ほどあはれなるハなし
けれバ是迄ハ毎も戦場に臨てハ高綱宗高が心にて鎗を取
ゆゑ右の平家を討時も両人のことばをおもひやり落涙にたへざり
し話なり各ハあはれとおもひしや思ふに各の武勇ハ只一
旦の勇氣にまかせて真実より出るにてハなかりしやと思ひけれバ
夫にてハ頼母しけれどあやぶきまでも我々

○善徳公 御諱清康 安祥二郎三郎殿と世に称し申せし 士卒をあはれみ勇材おはしまし
せしかバ人々其徳になびき従ひ奉まつり尾張國に向せ給ひ
森山に陣せさせ給ひしに不慮の事出来て安部弥七
郎弑しまいらせける植村出羽守いまだ新太郎 一説新六郎とやせ が十六歳にて御側に有合せ弥七郎をバたちどころに誅して

御家人ども召あつめられて唯今これ限りの植村人々に向て侍
敵をば既に切て棄ていろ〳〵ひれ〳〵事もなく腹切て侍供可仕
いつ人〳〵主君のかゝる出来ん者を出さんこそ〳〵ちゝ丈功
いつよりも不及おもてゝい者ども侍側ふぐたいば誰ら侍身ふ
べき侍身一人者ふ侍側よりみるこれ神明の冥助とやうべき
侍まゝば腹切て冥途の侍供ヤさんるまゝ誰ら侍身ふ
べたまゝば各生ふ存のごとくぬるまひて可侍ふ不ハ必死
近きよりあるを今ゆいづゝふ後きんとも存ぜぬと答ふ植村
ヤて生ふ死ハ何と向ふ生時抑ゝ侍ふ必死ハ〳〵ゝ十日を限
るゝ〳〵ふて厳かゝ〳〵せまひぬとかゝ紀の方ふ寄えるハ弾正
忠信秀軍勢をひきあて岡崎ふ攻来らんられら立て暇

きゝゝバ誰ら若君の御為ふ矢の一ちもかゝゝ〳〵村出ち
べきさまゝバ〳〵れ〳〵ふ討死ハ此時ふ有と覚ゆ同じく死せん命
まゝ〳〵と十日を隔つべゝ侍身ふ切腹をきひてとゞめんふル
死ぞゝいくバ植村家てゞふ理るおきゝバ人〳〵と倶ふ同じく
討死をせんとて密時ふ引返て案ふたがハず織田信秀八千
の兵を引率して三河ハ国ふ打入り大樹寺ふ陣ゝるを
此時内膳正信安も背きゝ也上野の城ふ立て兵をおこ
ぬるまゝ〳〵属せ一国人ども多く心変してゝり引返しゝる
侍家人ふ僅ふ八百人わゝ君ふ侍暇乞して一同ゝゝとなる
さけびてゝて打出りゝ二ゝふ〳〵ゝて伊田のゝるゝふ打て
出づ此人〳〵の義ゝを神明感じきひゝん此所ふ見えきひ

八幡宮の鳥居れかゝるの方ゝ向て六尺餘りうごゝ動きゝ
こゝて不思議とりも作りあるまゝ人ゝ大ゝ力を落くゝよせ来る
敵をまつ〻ぐゝ此取ハ上ハ霜枯の野路もゝふ下ハ賤が田の
面ゝかゝふゝ一ときあり織田家ゝ軍も同じく二手ゝ分て上
道下ゝゝこゝゝふ向てよせ来る八幡の宮殿ゝ方よりして向
羽の矢ふり来りかゝゝこの上ゝおらかゝゝと見物の人ゝ目ゝ見
てゝり上ゝ向ひ〻味方野ハひろゝしき中ゝふゝゝえられ一人も
のゝゝず討死て植村下道ゝゝ向てまゝゝをかく味方僅ゝ
四百人四千のかゝゝをあ破ゝ又上ゝゝ向ふ野路のゝゝ
さも散ゝゝゝれゝ信秀かゝゝさいのゝ生て尾張国ゝ引ゝ
まゝゝ伊田の合戦ゝて十倍の敵ゝ猛〻たゝかゝすゝ

中ゝて大将まゝまゝあぬ軍ゝしてゝゝゝゝゝゝ君をたゝてゝ
古今ゝ比類ゝゝゝゝゝゝゝ義ゝの節操を作りたゝゝく義
談ゝせり

○文亀三年細川武蔵守政元の長澤倉と云者武畧ありて
近江を半切ゝゝれども蒲生下野守貞秀入道知閑音
羽の堀ゝ接て沢倉と軍ゝ沢倉音羽ゝ山城ゝれば水乏し
かゝゝて水の手を少り切ゝり知閑敵より見ゆる矢倉の前
小馬どもあゝゝ牽出せ白くゝけゝゝ米を桶ゝ入ゝ
ゝけゝ人ゝ躍ゝかりて馬を洗ふ沢倉遥ゝ見て思ひの外
小城水ゝかゝて久しく陣せば兵粮ゝゝうゝて困を
ゝて引退くゝゝを知ふ歩内ハよくゝゝりつ小倉ゝりての要害

小勢手て出一回切くり十分の勝利を得きう知閑八氏郷の祖父なり

○大永年中細川武藏守高國入道道永三好左衛門督と戦ふ

三好桂川を渡て立ての体へおしよせる波多野備後高國と怨うらて丹波の兵を引具し立て叛き三好小兵衛尉の軍敗まこれ高國は將荒木安藝守百ばりの兵を引ひろち人こ世ることを月花酒宴の時は国人は似さう

○上恥をもこ弓ろうなる世ろやはれ只今道永の為ふ命をすてて恩を報ぜべしはたゞ道永のごまたいじ戦場を退きこうとも人並ちまこバうぐち操のみ訪こべきこと

へども義を義とせざる引ぞとこ多こ非で各又真の上とこて

ままを同く義をぬんやいおと思こんこハ張べこそいふと

いへバ皆こハ口惜きこもを思日比の恩をもろこめきこと

笑こ人いうでかこる時きこるこふこをすべきこてかこも

落ちべきこ荒木さてあこん宴こ主後の契世世のこと

ハうざりまことおこひく京軍は朋こをこてひ

とれこき待こ阿波丹波の兵競ひかこと間をくう

けこを誰こ笠領の下に荒木安藝守こ考ごと

呼こ一回こ立あこ先こけこ敵十人ばこたき伏まこ

歳を追こ年五六十間ばこを限とこ戻ばくこなる

べこ遠く追つあて疲まこと又ここ折こかこ

敵を待こけこたきこけいく度とれく戦ひきこ敵

討るゝ老數をもつしまで荒木と從一人ものこらず討死しける
間に高國僅に近江へのがれけるが荒木平生士卒を愛する
に懇情を盡せり古への食を分衣を解樂を同し苦を共に
するの風ありし故一の功ある人をすてざる時荒木がもてなし
由つくる人と荒木が士ありかろき者と倶に疫痢を煩ひけるを
療治に力のかぎりに心を付て由つくある人よりもすゝめければ
はいまだを恨けり荒木縁者ハいまゝ問でもんを損る人あるまじ
何がし賤しき者ハ人ねろそろにせんとこ心をあきれハ
療治おこなり給ん縁者をおろそろにするにハ有まじとも先
重き處よ心を付せりたまり每事ある時ハ縁者もてなしと之
ども事ある時ハ士卒の切なるありまつしき一族由とあり

有とても陣くされしかまじバ互に死生もえられ士卒ハ戦場に
死生を共にすまするもれあまじバ一人として本意を失人ありまじ大
なる恵ありと答けるを士卒ともに人々恩を思ふ事骨髄
に徹せりとなん

○武田晴信父を逐の後諏訪頼茂小笠原長時多兵にて甲斐に
攻入て韮崎にて一日の中に合戦四度に及べり晴信韮崎に
向ふ時諏訪小笠原のかたふゆかりある者原加賀守をなとし
て、かかる甲府に残されけるまじハ原人よく向ひける合戦に各さ
ち功名をとぐべきまとをめおかれしハ二心を疑ての事なれ
今日敵に向ひてハ長く弓矢とる家の恥とならんハいかにとかて
皆二んたく粮を棄てしんよりて敵にあひて討死せん半勇士

の志ありとて並時ふかせられ此時晴信
軍をすゝめ三度戰ひ疲さるゝ事数長時一度ようて
進み来まで既に危くなんとすれども原が来るを力として
いさみまもむ晴信原をよびて廿志を勸め日向今井
をを後ふひろさ勢競ひかゝる故に帯りて折やぶるべきを
是晴信士を激勵の策とわぎとて原を甲府に残さ
なるべし

○織田備後守信秀松平三左衛門忠倫と密に謀りて岡崎の城
を攻るべしひとく岡崎に洩ゆるしば應政公甚いきどほり
寛平三郎重忠を召上和田に往て伺ひて隆
秀三左衛門を刺殺す来き偏に紋を頼むよと仰あるべし

寛家にて上和田に降参すべきなるべし三左衛門
岡崎の士心を通ずるものあるべきも紋兄弟を味方にせずや
と思ふ新ならざるべ大に悦て懇ゝ取なすべきかくて夜
深て使案内をよくしるべきを忍びよりて腸を脇差を
以て三左衛門ずるべき後を二刀刺てのがれ去る平三郎が弟助大夫
重も兄があとを慕ひて上和田にまり隍の中にかくれ居るを
待ちみて打つまとく岡崎に帰る上和田の者ども追かけるとも
及ばず應政公感状を賜り羽栗にて百貫たまはりぬ天文
十六年十月のまゝ應政公ハ東照宮の御父なり
一説脇差を抜りるる時ちまを以て刺殺すべしつき突きて
双をめるべ必声をたてゝ拉ちばおきありせ逃みて汝のがれ

得ドつき棄て遁げまと作られしぐも駆りて脇差を
すてんと有るを那ぞと呼ひぬて出れば采して三たまつ解
をなげ人を呼りる為各起合て追うまてもらく逃れて
帰るしつり又一説に平三郎ハ恐倫ゲ平安城長吉の刀を
こり得てゆり忠倫を刺殺せしまとやせしバ即其刀を
平三郎小賜りきれもいなり

○天文年中大友義鑑の臣朽網下野親兼内謀反しく高崎の
城ゑ二の丸を乗とりて出てこもりしに佐伯惟常ハ大友家ゑ
旗下なるがかくて家杵築より発ぬ佐伯平生鷹狩を好
む者かりの為まハるとて軍たちの為なり狩に出る時ある日
途中より使を走らせて士を持る者ハ騎馬の軍
兵を引つまて即時に来る歩士又ハ引ゑ物主ままハくみの彩を
ひきつれてかけ集るこまて思ハ不意の時とつくどもさわぐ中か
し半時斗の間あまバ数日おもり下知せしもも陳列惑ひて
ものなりと使小走らす者ハ壮なる者を三十人撰て馬乃
前へ小ぶつまてり常小かけまりふなまて息長く足健ふ
しく馬中もおくぬぐれを時佐伯ゲ士杉谷次郎太郎
同次郎三郎とて兄弟あり和ふ一番乗ふと志し城の堞い
づまの方ゑ上るまつしかんと目をくばりるふ堞の隅
ゑ愛を目を射速やりの柄を四ゑ所縄ゑく足手をを
結ひ一回小攻かるる時杉谷兄弟亀て心を付亀し雨小粉
を近づき居て走まつくと捨をたてうけ終に登りて

一番ハ入道トノ
○北條早雲盲人ハ無用のあるとて小田原頼りのめ〻〻法師を
め〻〻のて海ふりづけよ沈んとせまるしバ盲人皆四方へ逃
ちり〻〻ゑ中を潜ル間ハ用ひられ〻〻とぞ
○陶尾張守晴賢大内義隆を弑〻〻れバ毛利元就陶を亡
滅んとせ〻〻まどろ〻〻陶めく〻〻法師一人を間者として元
就の謀をもる元就始ハかくてもあれごろしゝや〻心付ぬ
時陶ゲ長永来丹後ちられ志を通ぜ晴賢をうち被ん
近きよありと語られ〻〻を彼法師やゞて陶ハ告たり〻〻
元就又書状を贈ら〻永来ハ周防の岩國の城ゝ
彼書簡を山口〻〻奪とるべ〻〻やゝ〻〻せられまぶ

陶大ハ怒て永来を殺しぬ元就ハ法師を近づけまゐ
をかゝり習ふと称しかゝ〻〻ゑられぞ陶傳へ写て悦ぶす
限なし元就まこ〻〻東軍評定せ〻まとるゝ敵大軍ゝて宮
島ふおしとゝ〻〻ばいゝハせん是吾亡ぶくき運のきゝ兆と覚る
なり又草津廿日市ハかゝ〻せるバ岩國の弘中参河ちられ
心をあハすれぞ裏切させく陶をゝち被〻べ〻〻とぞ語られ
おゝ〻〻ハ陶を防ゞん地ハ楫尾の城ゝでハ狭〻〻ゝ要害
なし宮島ハ渡らバ乗来船を焼て帰路を塞ぎく
軍せゞ〻〻とゝ〻〻ゝ故なゝ〻〻ゝめ〻〻法師かくゝ陶ゝ告
〻〻ばちゝバ宮嶋を攻なんこゝ弘中参河ゝ隆包紙〻〻
〻〻じとゝ〻〻陶ハ弘中が二心を疑て〻〻も入ぞ弘治元年

十月四萬あまり大船にとりあつめ宮島より渡て四方を取
かこみ元就も今度は十死一生の軍と思ひ定め吉田の城
を出られ四千の兵にて後巻せられ候ひしに地蔵前
の祝日ごろふ蛤舟に乗ふ宮島へ渡り城近ぢかく心をあ
つせ士一人祝のまねさ勢宮島にとりこせられ陶が者ども
元就はいくさと向祝まんに元就は草津廿日市へ陶屋おいよせ
まんに兵備利あるくさを宮島を攻させ家をだて京く
なんぬとて火立浦にあさされて打これが引返されいくめを
かこる是より陶が者ども おこるあ元就はひそかに軍のさる
くとあ一手は洲屋明神の前より船よりなぐり天かの
浦前を多宝如来のかくを通り宮島の町口へ向ふ

一手は吉田郡山の百姓ども五千俵ふ嫡子隆元を大将として
弥山嶋より西の山ふれ木末ふたいまつを結付百姓ども
多くて岩い松ふくつ打せ夜半の鐘を相図ふ同時ふ火をたた
へ吉川元春は船ふかり毎ふ浦口ふかけ並べる陶が船ども拔
焼ぢめよと謀を定めて十月晦日ふ草津ふ引退べし
風雨やまぬは元就は今夜火立浦よりとるべし二日の兵粮と物の
具の上にはけよとて小若の駄どもを先返しく引退く体にも
てなし日もやうれば俄ふ惟今宮島へわたり思ふ敵を討
やうべしとて船ふ毎ふ乗べしと下知ひしくと打乗筆かとも
元就が船の火をたくにもへの梶をたまてて酉の刻
ぢうふ火立浦を出る打あ北風ぢうふ吹ふ事飛ば

おひまれぬるぞといさみたちて夜の刻ばかりに宮浦の西ふつき
て陸ふあがり船をバ一艘ものこらずに火立潮に乗せまゐらせ元就
かのめ〻法師とひさ出ぬ〻おのまゆゐ〻こそ〻〻年頃の志をバ
とげつまとて海中にちぎめられ〻〻とうや隆元ハ弥山島ふ打上り
元春ハ洲屋浜の神の前より小早川隆景ハかゝめて
より向ひ〻るぶ一度ふ関のあげをあげ弥山島の木末に結付て
出い松に火を付まゐらせバ陶が軍兵驚きさわぎたるゝ事を
元就おめいて先をかけまゐらせバ陶が者ども数百人討死しぬ
元春隆景も横さまに進て三浦越中ちと隆景捨を合せ
二番をたき伏まゐらせバ内藤内蔵允おり合て首をとる弘中
三河守も討まゐ陶が軍さんぐ〻敗北しぬ陶も旗本に城

すゝめて隆景と戦ふ元就の兵栗屋又四郎先をかけて討死
せ元就ものさきを切てかゝ〻ぬ〻ちゝれ〻まゐらせバ陶ハ引退き
て道場山にありゆれバ十一月朔日元就諸軍をあつめ卯
の刻より午の時ゝぐ十二度乃戦ふ互に討ゝ者数をもつぐ
陶終にかゝるとて自害をゝるを首ばゝ出して梟せられぬ
討ゝ〻所の首四千七百八十餘生どり八百五十餘人ゝゝやゝに
ア西國ふ就ふなびき従ひ申ぬ

◎宮嶋合戦の前陶伊豫ぬ河野に船をかゝる同時元就も又
船をかゝ〻使をやゝまゐりぬ陶ハ伊豫ゝゝかゝ〻元就ハ只
一日かゝ〻ぬ〻ハまゐ宮浦ゝゝわゝて即戻まゐべしといひおゝ
まゐらしバ人留島通康冥て一言なれど思ひ入ゝ夜ゝ

毛利必勝べきの疑ふべくそ三百艘をかしこり給
ぶ果して陸敗まて滅亡しき
○筑州宇都宮の軍那須ふよせ来るを撃破る既に大将を
り討とるべうしを那須の長臣大関多安兵をもつて北る
を追て人皆を度宇津宮をも破るべきとゝ夕安堂て
雲ハみるもゝひゝてゝ秋風紅松のしゝく月をゝる
ゝ那といふる古歌あり今味方よさせる根本ハ固もなくく宇
津宮を攻破らバ小田原ゝう那須を新とせん強ばいるとして
那須しちりかゝむべき宇津宮をのゝて小田原をいい
らハせ其ひまゝ那須の根を涼く夢を固くく小田原を敵
ゝもゝつゝとゝ皆人ゝ安堂を安堂ゝり

○太田左衛門大夫持資ハ上杉宣政の臣ゝ鷹狩出て雨に遭
あゝ小屋ゝ入て蓑をかゝんとゝゝ乞女ハ何とも拒をバいたゞ
して出ゝ枝折ゝ折れバ花を来ゝ非ぞとく
怒ゝ帰ゝ乞を宇しゝ人のゝまハ七重八重ハ咲けども
やまぶきのみハひとつだになるべしといふ持資おどろきてそれより歌に志をよせゝり宣
政下総の廳南に軍を出る時山涯の海を通ゝ山上より
弓を射うけらきんや又波満さんやゝりがゝとてあや
ゝ折ゝ夜宇の手ハを持資いざゝれゝ来んとて馬
を出し そゝりて波ハ于ゝとゝいゝしてゝりゝやと
問ゝ ゝくゝり近ゝ海ゝ小船のゝりひとそ

しとよめる哥ありて千尋の底までもすみわたるといひければ又何れ
の時にや一陸とられ时も秋の末かたなりしに利根川をとほらせ
御供とする人ありさしてまかりし浅瀬も志らで持資又 持ことひとへき
御やハさらぐ山川の淋き流れにこそ淵は波ハたてといふ歌なり
波音あらき所をわたらせといひて早く渡しけり持資は
道灌と称せ。
雪玉実隆の歌よみたるになしとてや山吹の実ひとつだに
哥ハ心ありしもと抄中後拾遺和哥集云小倉の家に住侍る
ころ雨のふり侍りける日みのかる人のはべりければ山吹の枝を
折てとらせ侍りけれども心もえでまかりすぎて又の日山吹の花
ごゝろもしらずといひおこせて侍りける返ことにいひやる 兼明親王

七重八重花ハさけども山吹のみのひとつだになきぞあや
しき かなしき イニアル歌

○持資京に上りしとき慈照院殿義政饗應せんとありしに慈照院殿
は一つの猿を飼おきて人をみれば必ずかき傷ふといふままに持資来
て猿をひそかに賂して猿をかり猿亭の庭にて出仕の装束
しく側をとほるに猿飛かかりて鞭を以て呼ふさはしたり
き伏せければ後には猿首をたれて恐れ居けり持資猿つる
ひの人に礼謝してその後又饗應の日によびて
慈照院殿かの猿に通るべき所ありつなぎおきて持資
を損なはせんと待ちしに持資をみて猿かへりて
ひれ伏して持資衣紋にいさゝかもあらざりける

なまじ唯人に非ずと大小を差さしつるより彼猿を殺さ
しる戸を猿戸といふそれより猿戸といふ名ハおこれる

道灌ハ逸言よりて殺さまてしより文明十八年七月廿六日
なり辞世の歌とて世に云傳る かりそめの時ハこそ命のを
しけれ人と思ひもてなせハ松田が家の物語ふもかく
ありしより道灌ハ和歌の集よりしハ戦士といふ詞ふ
く康正元年乃冬芝澤の役よりそ歌も味方も入まゝ三
日ともてはやみけるそ事なかぬされどもやうやう武威
はやうて北条憲定のめ終に自腹して傳兵おのが志を
うなのあるハにあらてかゝるに死するも伝へ聞

藤沢のかゝれ杉原のむれゝ者ゝ男ありしに味方中
村治部少輔茂重顕とて京家れ人の世にあづかくやうゝ
秩父者ゝまて伝りしなん敵の男ハとりけるゆふのりて
二つびき輪はなり弦の紋付けるさま物ありしに目ふ
よりハいあしく見りるもの たりて後をハせる月の
ふ故の男ハきとえられやそ中村がもづゝ首をとりて我
陣に来りてかりゝるゝ者ゝいとそ壮年ふもゝ
ゝ男れゝ出ゝて出ゝけ高ゝくきゝ持ゝく髪のあるたで
ゝ出ゝ哀もいやしあるゝ者ゝ
新ゝ中村宗弘他ゝ
ゝとすあられバ其首ゝむりひて
ゝ

えられば松田物語幷に世に伝へる所は誤なり

○安芸佐伯郡に木谷知矩といふ者ありて宗晡といふ毛利元就に
に後はざりられば攻られて兵粮すでに乏くなりぬ此時は
降参をすゝめらるゝ小父祖りうけ伝へて城を出やすく
人に接ぐべきやとて服従せば宗晡は連歌にんをもふ
と元就ゆゑ伝へて箭ぶくを城中に射入させられるを
歌はもかゝる紀本さるれ流なふる紀一説秋はもやぐるを本さるの義なるを
やがて射かへしをる

よりかゝて志げむ浦流の月
元就大に感じて囲をゆるして引とり後淫て和を求らるゝ
宗晡はまことに降参せざるを恥辱あるべし此上は城を出

るゝを元就ゆんごろよりて賓客のやうにもてなせられる

○輝虎武蔵の私市に城をかまへ時堵塚は後小大なる沼にて
堅固の地なり本丸を外より見るやうに築られるを打巡
て見られしに本丸より二の廓に入る廊下の格子のこと
作りにて小地白のかぶびきにて人の新水ひらひらと
地なのうるはしとは地を白くゆん拭黒く漆にて塗
比女は多く美しき物にぞ輝虎是を見る事三度に及ぶ
かまびば女丸に八人奥の女童をこゝにおきつゝとあり
柿時和泉に下知して大手を攻させられ城中あい准
今攻らるゝといふ伝へ聞れ先に防る其ひまに近きなる
この民屋を壊ち代に掘みく後の沼に打いる間の事とあ

一ノ二十終

けがおのきをそぶ女九の女童大ゑ殿さわぐで二の廓をさう
て逃まゝふ大ゑ者て防ぎる兵どもさてハ内通の者ありて
本丸を打破らしゝとゝひ或ハ自害〳〵或ハ降人とゝる
粉虎の謀ゑりて力を労せずして城忽落ちりり
○輝虎と小条と武蔵の忍ゑく陣を合て此時太田美濃守
資房入道三楽ひそゝく謀を小条ゑ通ぞ輝虎かゝと家て
馬副の者も具せず唯一騎三楽が陣ゑ行て三楽が三男安房
ち十二歳なりしをひしとゝらへてよくもおひしらぬ法師よ
いざとゝ子ゑせんとくうちつまて帰られゝるゝ三楽が軍兵
ども其猛威小恐まてくゝ手さきたこともなりまり是より
三楽も誠ゑ心服しゝりをるとゝや